

木曽三川 歴史・文化の調査研究資料

木曽三川

2014

冬

Vol.89

平成26年

地域の歴史

陶磁器産業を基盤に発展してきた
東濃の中核都市・多治見市

地域の治水・利水施設

美濃焼物の木曽川運送

歴史記録

高木家文書にみる宝暦治水 第一編

宝暦治水の前提

—地域住民の環境認識に基づく行動—

研究資料

海津市歴史民俗資料館 水谷容子

治水神・禹王崇拜の広がり



地域の歴史

東濃の中核都市・多治見市

岐阜県の南東部に位置する多治見市は、上質の陶土に恵まれ古くから焼物の産地として知られています。基盤産業である窯業に加え、名古屋市まで三〇分という利便性からそのベッドタウンとしても発展してきました。



岐阜県の南東部、愛知県との県境に位置し、北は可児市、東は土岐市、南は愛知県瀬戸市、西は愛知県犬山市に接しています。土岐川が侵食してできた盆地を中心とし、北・東・南部はなだらかな丘陵が起伏し、西部はやや険しい山並が県境となっています。東から南西に流れる土岐川は愛知県に入つて庄内川と呼ばれ、伊勢湾に注ぎます。気候は温暖で降雨・積雪量は少ない地域でしたが、平成一九（二〇〇七）年八月一六日に日本国内の最高気温（当時）となる四〇・九℃を観測し、「日本一暑い町」として話題となりました。

市内にはJR中央本線が土岐川に沿つて走り、国道一九号や中央高速道路が市の中央を東西に走っています。名古屋市の中心部までJR中央本線で約三〇分という利便性から、一九八〇年代から一九九〇年代前半にかけて市内各地で新

興団地や分譲マンションなど住宅開発が行われ、名古屋のベッドタウンとしても大きく発展してきました。

丘陵地および段丘では先土器時代から縄文・弥生時代の遺物が多く出土しています。西坂遺跡からは珪岩製の旧石器が発見され、県内でも最古の先土器遺跡であることが明らかにされました。縄文遺跡には、白山神社遺跡・平尾遺跡・大沢遺跡などがあり、このうち平尾遺跡では弥生時代後期の住居跡も発見されています。土岐川流域多く分布し、虎渓山一号古墳から

土岐川沿いの盆地に発達した多治見市
岐阜県の南東部、愛知県との県境に位置し、北は可児市、東は土岐市、南は愛知県瀬戸市、西は愛知県犬山市に接しています。土岐川が侵食してできた盆地を中心とし、北・東・南部はなだらかな丘陵が起伏し、西部はやや険しい山並が県境となっています。東から南西に流れる土岐川は愛知県に入つて庄内川と呼ばれ、伊勢湾に

戸層群と呼ばれる地層で、その上層は古木曽川の砂礫層で占められ、その下部に土岐口陶土層といわれる粘土層がみられ、この地方で大量に生産されている陶磁器の原料として古くから採掘されてきました。

市周辺丘陵地の上部地層は瀬戸層群と呼ばれる地層で、その上層は古木曽川の砂礫層で占められ、その下部に土岐口陶土層といわれる粘土層がみられ、この地方で大量に生産されている陶磁器の原料として古くから採掘されてきました。

古代国郡制下では、市内の土岐川以北が可児郡池田郷に属し、土岐川以南は土岐郡であったようですが、平安末期には池田郷の後に、伊勢神宮池田御厨が成立しています。古代国郡制下では、市内の土岐川以北が可児郡池田郷に属し、土岐川以南は土岐郡であったようですが、平安末期には池田郷の後に、伊勢神宮池田御厨が成立しています。

多治見市内の丘陵地斜面に多くの古窯跡が散在していますが、これまでに発掘調査された最古の古窯跡は須恵器を焼成した北丘四号窯・五号窯で、八世紀頃のものと推定されます。平安中期から後期にかけて灰釉を施した白瓷が盛んに焼かれ、その窯跡は主に土岐川に沿つてあります。土岐川以北は池田御厨の領域で、御厨の成立時期と白瓷の生産開始時期がほぼ一致することから、白瓷がこの地域の特産として奉納されていたと思われます。平安末期には白瓷に替わって山茶碗と呼ばれる無釉の陶器が五一世紀まで広範囲で生産されました。室町時代中頃には窯は土岐川の南に移り、古瀬戸系の窯は土岐川の南に移り、古瀬戸系の窯は



古来からの陶器生産地
多治見市内の丘陵地斜面に多くの古窯跡が散在していますが、これまでに発掘調査された最古の古窯跡は須恵器を焼成した北丘四号窯・五号窯で、八世紀頃のものと推定されます。平安中期から後期にかけて灰釉を施した白瓷が盛んに焼かれ、その窯跡は主に土岐川に沿つてあります。土岐川以北は池田御厨の領域で、御厨の成立時期と白瓷の生産開始時期がほぼ一致することから、白瓷がこの地域の特産として奉納されていたと思われます。平安末期には白瓷に替わって山茶碗と呼ばれる無釉の陶器が五一世紀まで広範囲で生産されました。室町時代中頃には窯は



白蓋広口瓶（十世紀）



多治見国長公肖像



永保寺

年に織田信長より朱印状を与えられた加藤景光は、瀬戸から久尻村（現土岐市）に移住して窯を開きました。この頃より各地から陶工が多治見村および周辺村々に移り住み、それぞれの地で陶祖と称されました。美濃古陶と呼ばれ、茶人などからもてはやされた格調の高い茶陶（志野・織部・瀬戸黒・黄瀬戸など）が多数焼かれました。

中世の美濃地方に権勢を伸ばしていったのは、摂津源氏の流れをくむ美濃源氏のうち、土岐郡浅野郷（現土岐市浅野）などに拠点を持つた土岐氏でした。承久三（一二二二）年の承久の乱では、土岐光行（弟の光時との説もある）が後鳥羽上皇方として木曾川で幕府軍と戦つて敗れています。

土岐氏の一一代にわたる美濃守護職の基を開いた土岐貞は、禅宗の夢窓疎石らを当地に招きました。疎石らは長瀬山に庵をむすび、正和三（一二三四）年に觀音堂を建立、これが臨濟宗南禅寺派虎溪山永保寺の草創となりました（疎石が当地に滞在した経緯・年次には諸説あります）。「風景のよき事は他国にも聞こえ、古人も賞賛せり」と「新撰美濃志」に記された景観が、中國廬山虎溪に似ていることから虎溪山と称したとも伝えられています。

近世の領主と美濃焼の復活

慶長五（一六〇〇）年の関ヶ原の戦いで、当時この地を支配していた田丸氏が西軍に属したため、戦後の多治見市内は幕府領・大名領・旗本領が入り交じって支配關係が複雑になりました。小早川秀秋の家老・平岡頼勝に一三〇〇石、尾張藩給人に一五〇〇石、旗本妻木・林・馬場氏に三〇〇〇石、永保寺領五九石、他は幕府領で合わせて六〇〇〇石ほどでした。このうち平岡・妻木氏領は、後に幕府領に組み込まれ幕末にいたりました。

桃山時代に一世を風靡した美濃焼でしたが、産業としては江戸時代初期を過ぎる頃には衰退してしまった。美濃焼が再び盛んになつたのは、江戸時代末期に近い享和（一八〇一～一八〇四）・文化（一八〇四～一八一八）年間で、磁器が焼かれるようになつてから

正中元（一三二四）年に起きた後醍醐天皇の最初の討幕計画である正中の変では、頼貞の子・頼兼が計画に加担し上京しましたが、陰謀を察知した幕府軍に討たれたとされています。この時、土岐氏一族で多治見を拠点にしていた多治見国長が頼兼に随伴して共に討たれると『太平記』に記されています。

多治見市の誕生

明治二二（一八八九）年の町村制施行によって、土岐郡多治見町、可児郡池田村・小泉村・豊岡村・姫治村（一部は現可児市）が成立しました。その後、合併・分離を経て昭和一五（一九四〇）年には市制施行し、多治見市となりました。それ以後も合併・分離があり、平成一八（二〇〇六）年に土岐郡笠原町との合併により現市域となっています。

伝統の窯業は、明治になつて陶磁器の生産・販売が自由になつたことで大きく躍進し、海外への輸出も盛んになりました。旧来の陶磁器に加え、タイルや耐火煉瓦・石膏など様々な分野に進出し、ファインセラミックスといった先端産業も育っています。近年は美濃焼をテーマにした観光開発が進み、多治見市街にオリベストリー・多治見市美濃焼ミュージアムも開設されました。

- 参考文献
- 『多治見市史 通史編』 多治見市 昭和六年
 - 『岐阜県の地名』 平成元年 平凡社
 - 『日本地名大辞典・岐阜県』 昭和五五年 角川書店



多治見市美濃焼ミュージアム展示室（写真提供：多治見市観光協会）

などの観光ボイントやたじみ陶器まつり、陶の里蔵出し市といったイベントで賑わっています。

美濃焼物の木曽川運送

良質な陶土に恵まれた多治見市は、古来より作陶技術の先進地であり、近世には全国でも有数の陶磁器生産地でした。ここで作られた製品は、主に木曽川を下つて各地の消費地に送り出されていました。



江戸時代末期になつて盛況となつた美濃焼物は、全国各地に販路を拡げ出荷しました。天保年間における市場は、江戸・大坂・名古屋をはじめ三河・近江・伊勢・越前・遠江・信濃・甲斐に及んでおり、多治見はその集散地として中心的な役割を果たしました。多治見からの運送ルートは、主に木曽川を流して桑名に至るルートと、下街道（善光寺街道）を陸路で輸送し名古屋に至るルートがありました。



今渡街道（小泉町）

木曽川筋の抜け荷取り締まり

四八号に相当するルートで、街道沿いには、馬頭観音が多数残つてあります。木曽川流送を伝える史料である天保一三（一八四二）年一月の「川船問屋諸荷物取扱方並庭賃等書上」には、野市場村川船問屋清三郎のもとに送られてきた美濃焼物三五〇〇駄は、江戸行、大坂行、大垣・関行、越前・江州行、岐阜行とそれぞれ五つの販路ごとに荷分けされ、「七百五拾駄大坂送り、千武百駄江戸送り、右江戸・大坂送りの分、勢州桑名湊まで川舟にて積下げ仕り候」「百駄越前・江州行、九百五拾駄大垣継、大垣送

荷は、周辺の窯元より多治見に集められた後、今渡街道五里二町余（約二〇km）を馬背で運び、野市村（可児市）で川舟に積み込みました。積み下げ湊は野市場村が最も多かつたのですが、高田村の徳利などは少し上流の川合村（美濃加茂市）でも積み込まれていました。今渡街道は、現在の国道二



馬頭観音（宝町）

り、右は大垣まで川舟にて積下げ」「式百駄濃州岐阜送り、右は笠松まで川舟にて積下げ仕り候」と書かれており、川舟を使って桑名・大垣・笠松など下流の中継地に美濃焼物が輸送されていたことがわかります。

江戸時代末期に盛況を取り戻した美濃焼でしたが、その生産・販売は尾張藩の統制下になっていました。天保六（一八三五）年、多治見村に美濃焼物取締所が設けられ、美濃焼物取締規定が定められました。これを逃れるため、窯元から直接買い入れた仲買人が密に消費地に持ち出す抜け荷が横行しました。これを逃れるため、窯元に消費地に持ち出す抜け荷が横行し、尾張藩は木曽川の荷物改めを強化しました。第一の関門が荷積みをする船問屋で、当初は問屋船庄屋手形を改めるだけでしたが、後には焼物類はすべて取締所印紙

のないものは川下げ差し止めとなりました。第二の関門が桑名湊までの途中の尾張藩領北方（一宮市）と幕府領円城寺（笠松町）に設けられた番所で、ここでも取締所印紙を改めました。第三の関門は桑名湊での荷物改めで、江戸・大坂への出荷量が増加し、これに伴つて抜け荷の方法も巧妙になつてきましたから、積み出しの最後の押さえとして桑名改所の役割が大きくなりました。

木曽川における抜け荷のルートとして、桑名まで下らずに牧田川と揖斐川の合流地域に発達した船附・栗笠・鳥江の揖斐川三湊で荷上げし、伊勢街道の牧田宿を中継して中山道の関ヶ原に出て米原に至る道筋がありました。行程が九

里半（約三八km）であつたことから「九里半廻し」と呼ばれ、桑名湊の荷物改めを回避したので、取り締まりが難しいルートであつたようです。

木曽川による輸送の終焉

明治期になつて美濃焼の生産・販売が自由に出来るようになり、木曽川による輸送は益々盛んになりました。多治見と野市場湊を結ぶ今渡街道は、交通量の増大や荷車の普及に伴い、明治一二（一八七九）年には道路の拡幅と修繕が必要となりました。改修を呼びかけたのは、この街道を一番多く利用する多治見村で、沿道各村による改修が始まり、翌二三年に工事は竣工しました。

木曽川の美濃焼物輸送が盛んだつたのは、国鉄中央線が開通する明治三三（一九〇〇）年までで、以降の輸送量は激減していくました。



木曽川の水を多治見市に ～東濃用水道の建設～

多治見市の上水道は、市内を流れる土岐川から取水し、上山

浄水場で浄化して家庭に配水さ

れていました。しかし土岐川は、昭和三〇年代後半から、流域での窯業原料となる粘土の製造によつて「白い川」と呼ばれるほど水質が悪化していました。水質の汚濁は昭和四五（一九七〇）年頃に最悪となり、浄水場で多量の塩素・活性炭を注入したので、全国で一番料金が高くますい水となつて、市民に不満が募りました。

こうした中、増大する生活用

水（上水道）の需要に対応できる安定した水源を求めていた多治見・土岐・瑞浪・中津川・恵那の五市と笠原町（現多治見市）は、単独では財政的に困難であるので、共同の水源を確保して各市町へ供給する広域水道の建設を岐阜県に要望しました。

県は、昭和四五年県営上水道供給事業として、木曽川を水源とした東濃用水道の建設計画を発表、翌年には厚生省（当時の事業認可を受けました。昭和五一（一九七六）年に給水を開

始した東濃用水道は、木曽川の水を関西電力落合ダム（中津川市）で取水し、高揚程ポンプで中津川浄水場に送り、ここで浄水し、各市町の給水施設に送水しました。

中津川浄水場は標高三四五・九mで、多治見市の低地標高は九〇m台なので、そのまま自然流下させると、送水管が破裂するため、釜戸（瑞浪市）と滝呂町（多治見市）に減圧施設が設けられました。滝呂町で減圧された水道用水の受水池を虎渓山、元町・滝呂町・笠原に設け、そこから各家庭への給水のための配水池・ポンプ場・減圧弁室を整備しました。

多治見市に清淨で安定した上水道をもたらした東濃用水道は、平成一六（二〇〇四）年、東濃西部地域における水需要増加への対処のため、東濃用水道と同時期に建設・運営されてきた「木曽川右岸上水道用水供給事業（可茂上水道用水」）と統合され、「岐阜東部上水道用水供給事業」となりました。



宝暦治水の前提

—地域住民の環境認識に基づく行動—

岐阜聖徳学園大学教授 秋山 晶則



図1 木曾三川流域大絵図（高木家文書）

江戸時代、わが国有数の洪水常襲地帯として知られた木曾三川流域では、養老断層にそつて沈み込む東西低の地盤構造（濃尾傾動地塊）を反映して、木曽川、長良川、揖斐川の順に河床が低くなつており、下流部では水脈が網の目状に結合していました（図1、名古屋大学附属図書館所蔵高木家文書。以下の記述も主として同文書に依拠）。

そして最大流量を誇る木曽川の水は、大量の土砂をともなつて長良・揖斐の両川に押し寄せ、逆流こうしたなか、それまで当該流域ではあまり見られなかつた地域共通性に基づく広域行動が確認されるようになります。まず、元禄十五（一七〇三）年には、水害の根本原因を下流域の新田開発にあるとみた高須・福束・本阿弥輪中七十二か村が、その撤去を幕府に求めて訴訟に踏み切っています。これを契機として、当時笠松郡代であつた辻六郎左衛門が主導する形で、桑名・長島藩領の新田が撤去され、さらに美濃国中の大小河川においても、障害となる竹木・流作場・洲・人家などを対象とする大規模な取扱い普請工事（宝永の大取扱い）が実施されています。

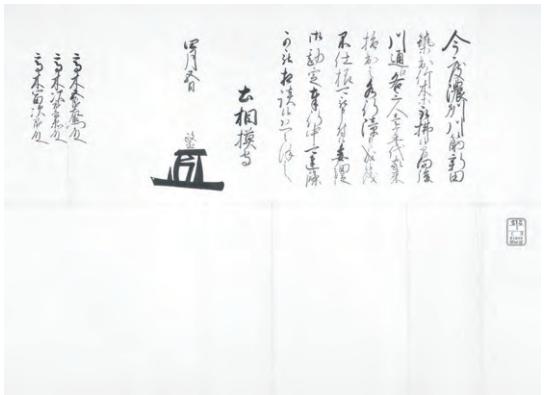


図2 宝永2（1705）年4月 高木三家に川通巡回を命じる老中奉書（高木家文書）

このように予防的見地にたつた水管理体制を敷いていきます（図2）。このようないくつかの理由で、木曽・長良・揖斐三川の流れを分け通す構想（以下では分離と表記）です。この計画者として、「宝暦治水工事は、實に為永が美濃郡代在任中に企画した設計を基礎として、実施されたものであると伝えられる」（岐阜県治水史）等、徳川吉宗に登用された井澤弥惣・兵衛が想定されていますが、その史料的根拠は不明です。

むしろ注目すべきは、「これより先民間でも三川分流の緊要なことに着目したものがあり、寛保の初め、濃州多芸・安八・石津・不破・海西・中島・羽栗の七郡三百か村が小庄屋らが協議して、笠松郡代滝（たき）小右衛門へ、濃州川々水行普請、

や洪水を生む環境にありました。さらに十七世紀「大開發の時代」をうけ、中下流部で新田開発や輪中形成が活発化すると、河道固定と遊水地の狭隘化、土砂堆積による河床の上昇が進み、破堤や輪中の排水障害により、深刻な被害が及ぶようになつていつたのです。

地域の共同性

これは、洪水を速やかに海へと流下させる河道整備＝減災策であり、従来の災害復旧中心の施策から災害予防に重点を移す、幕府治水政策の転換を告げるものでもあります。以後、幕府は高木三家を河道の監視・整備にあたる川通役に任命し、多良役所として笠松役所（堤方役所）と協働させる治

恒常的かつ広域的な治水政策は画期的なものでしたが、当該流域が有する構造的问题に対する効果は限定的で、早くも享保期（一七二〇年代）には、土砂堆積作用による連年の水害に悩まされるようになつていつたのです。

三川分離の構想

そこで登場するのが、木曽・長良・揖斐三川の流れを分け通す構想（以下では分離と表記）です。この計画者として、「宝暦治水工事は、實に為永が美濃郡代在任中に企画した設計を基礎として、実施されたものであると伝えられる」（岐阜県治水史）等、徳川吉宗に登用された井澤弥惣・兵衛が想定されていますが、その史料的根拠は不明です。

むしろ注目すべきは、「これより先民間でも三川分流の緊要なことに着目したものがあり、寛保の初め、濃州多芸・安八・石津・不破・海西・中島・羽栗の七郡三百か村が小庄屋らが協議して、笠松郡代滝（たき）小右衛門へ、濃州川々水行普請、

大博川締切工事を実施せられんことを出願したが、大規模な普請なので、ついに採用せられた。

（同上）との指摘です。激甚水害に見舞われるなか、寛保元（一七四一）年、地域間の利害調整の三川分離の要求運動が起つたのです。

いま、確実な史料としてあげられるのは、寛保元年十一月頃、引用文にあつた不破・羽栗郡とは別に本巣郡が入つた六郡二八〇か村により、今尾・万寿新田間の新川掘削及び油島先に五・六百間の木曾川受け築流し堤新設を求める方向で事前協議の動きがあつたことです。最終的には同年十二月、高須・七郷輪中七十三か村がまとま

り、多良・笠松両役所に願書を提出しています。

それによると、宝永大取払いによる水行の改善は一時的なものに過ぎず、近年では、南之郷・与左衛門新田などでの激しい土砂堆積、木曾川の河床上昇による油島先での逆流や揖斐川下流の流下障害が起きていると指摘しています。

こうした現状認識のもと、村々が対策として求めた内容は、堆積土砂の浚渫と流下障害箇所の撤去、及び油島先の木曾川・揖斐川合流点に、木曾川から押し込む流れを刎ねる長さ百五十間・水上二尺程度の築流し堤を新設することでした。

この願書に付されていた絵図（図3）には、堆積土砂が灰色で描かれており、付箋からその具体的な要求内容（後述）を知ることができます。

この願書をうけて、多良・笠松役所では勘定奉行所とも協議し、周辺領主の協力を得て流域調査に乗り出します。

寛保期の流域調査

実際の調査は、翌年九月八日から七日間にわたるもので、佐野家文書（海津市歴史民俗資料館寄託）や東高木家・北高木家文書（いずれも個人蔵）から関連絵図（図3・4）及び調査復命書などが確認されています。

それによると、調査隊は川船十

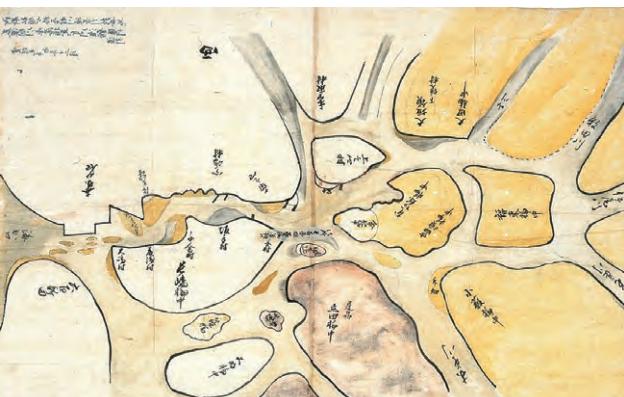


図3 寛保元年 川通墨引絵図写 (東高木家文書)

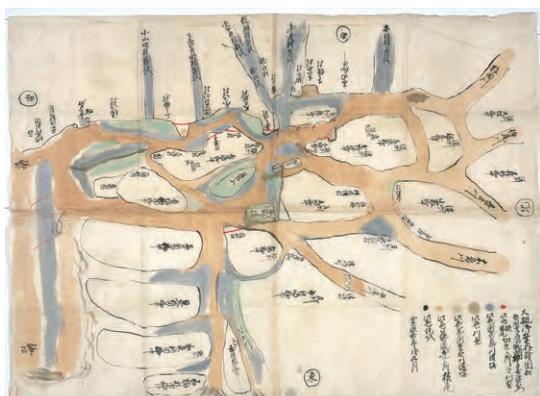


図4 寛保2年9月 大概御案内絵図控 (東高木家文書)

この調査の結果、把握された流域環境の変化は以下の通りです。

(1) 木曾川・揖斐川合流点の油島新田地先で板船の流下実験を行つたところ、揖斐川下流部（桑名川）に狭窄部があり、木曾川から流れ込んだ水が押し戻され還流する。(2) 海口部でも流下実験を行つた結果、桑名沖には、流下障害原因となる幅4 km・全長8 kmの巨大な砂州を確認。(3) 調

構想の共有化

多良・笠松役所が提出した治水計画は、「川替」「水行直し」などの流路変更と、「川広」「川浚」といった河道整備事業にわかつており、その概要を示せば、木曾川・揖斐川の分離策、桑名川通の浚渫・堀割、断層谷の砂防対策、佐屋川対策となります。これらは、七十

三か村の要求内容に添つたものであり、かつ、十数年後に実施をみた宝暦治水工事の骨格部分と一致する河床上昇が顕著。特に揖斐川下流では、元禄期に撤去された砂州が復活し、河幅の6~8割が埋まるなど、深刻な流下障害が起きていること。(4) 同じく海口部の鍋田川・見入川・筏川も埋まり、濃州からの水は専ら加路戸川に入する結果、これが桑名川の流下を横から抑え、三川全体の水行悪化をもたらしていることなど、村々の願書にあつた指摘通りの現象でした。

現地調査の結果をふまえ、流域環境の変化を把握した両役所では、滝川小右衛門と高木求馬の連名で勘定奉行所に復命書を提出し、改善に向けたプランを提示します。それは、流下障害を根治するような復旧は極めて困難との見通しを述べつつ、しかし、このまま放置すれば地域破壊に直結するとして、何らかの措置をせざるを得ないという厳しい認識を示したものでした。

し、その直接の前提となる調査及び検討、提案として位置づけられるのです。

従来にない画期的な内容を含む提案がなされたわけですが、勘定奉行所の了解は得られませんでした。寛保元年には、関東甲信越を中心、「戌満水」と呼ばれる大規模な水害があり、その復旧問題があつたことに加え、享保期來の川普請の盛行で幕府負担が増大し、普請費用節減に強く迫られていたためと考えられます。

これに対し流域では、寛保三年八月、悪水对策普請を求める幕領・尾張藩領の六十一か村惣代が江戸に出訴し、越年のうえ執拗に見分を要求する動きを見せています。その後、延享三（一七四六）年正月には、高須輪中中部の四十か村が木曽川・揖斐川の分離工事を要求しています。さらに、高須輪中南部の十五か村は、木曽・揖斐の具体的分離策として油島・松木間の築留堤か、油島上之郷の築留と南之郷大鳥居村間の新川堀割という二つの構想を提案しています。また、同年八月の帆引新田庄屋らによる普請請負願書では、根本原因を油島新田地先での三川合流と見た上で、多数の村々が要する流路変更には莫大な費用がかかるため、三川の浚渫と油島新田水分け打出し杭による分離策を提案したほか、翌四年十月には中島郡小藪村も木曽・長良川の分離工事を願い出るなど、両役所や地

域村々で三川分離構想が共有され、抜本対策として絞り込まれつあつたことが見てとれます。

延享の手伝普請

流域村々が連帶しての要求運動が展開されるなか、延享三年に高木家が勘定奉行に提出した報告によれば、流域二百四十四か村のうち、直近五か年の平均損毛率が八割を超える村が百八か村、五〇七割が八十四か村と危機的な状況が示されています。こうした中、延享四年に幕府普請役が派遣され見分を行い、その調査結果にもとづき翌五年には、幕命により二本松藩が投入されます。流域で、以後十六回も繰り返されることになる大名手伝普請の皮切りでした。

この普請では、油島に杭出を設置するなど分離策の端緒が見られるものの、幕府は揖斐川下流部の浚渫を第一義と考えていました。これに対し、高木家側の記録では、木曽・揖斐川の分離を最重要課題と捉えており、また、美濃の河川技術を無視する技術官僚への不信感を露わにするなど、批判的な姿勢が目立ちます。これは、延享普請が効果薄であつた原因を多良役所（高木家）の不手際とする世評を強く意識したものと思われ、高木家では以後、老中近臣への工作を行うなど、大規模普請の認可に向けた攻勢を強めています。

さらに宝暦一（一七五二）年二月には、両役所協議のうえ、勘定

奉行所へ流下改善計画を再提出しています。その目論見の第一は、逆川締切や石田村猿尾延長による木曽川の水を佐屋川へ分水するための措置であり、第二は、佐屋川通水のため篠川の高洲を堀割ること。そして第三に、油島先にて三川の川筋分離を企図した猿尾の設置等でした。

以上が、宝暦治水を目前にした段階での両役所の提案内容であり、それは、寛保期の流域社会と両役所が協働した成果物ともいえます。こうした中、延享四年に幕府普請役が派遣され見分を行い、その調査結果にもとづき翌五年には、幕命により二本松藩が投入されます。流域で、以後十六回も繰り返されることになる大名手伝普請の皮切りでした。



図5 宝暦4年8月 普請目論見絵図 (高木家文書)

寬保年間の流域調査の実態に迫るなかで、宝暦治水の前提となる計画過程が浮かびあがってきます。これが流域社会の環境認識と運動に深く関わるものであつたことを押さえておかねばなりません。

宝暦年間にいるとさらに流域環境は悪化し、請願が繰り広げられるようになります。これに対し幕府は、宝暦三年五月、代官吉田久左衛門を派遣し、地域や役所から意見収集をふまえて大規模な流路変更・河道整備計画を策定します（図5）。所謂「宝暦治水」事業の始まりです。しかし、ここで提出された意見書には、他地域の要求に反対するものが多数含まれており、環境改善のため計画されてきた普請が新たな地域間対立をうむ可能性を孕んでいたことにも留意する必要があります。

宝暦治水とは、幕藩制という政治体制のもと、このような複雑かつ厳しい環境に規定されつつ、地域全体で取り組まれたものでした。これまでの幕府対薩摩藩の対立図式や宝暦治水＝薩摩普請といふ顕彰面に特化した理解ではないく、普請全体を視野に入れ、川とう自然と人間がいかに関わってきたか、史料に基づき、冷静に見つめるべき段階に来ているように思われます。

歴史記録 宝暦治水の前提

研究資料

治水神

海津市歴史民俗資料館

水谷
容子



水谷容子

海津市歴史民俗資料館学芸員
1970年生まれ

共著『治水神禹王をたずねる旅』
(2013年 人文書院)
特別展「伊藤忠敬 海津を歩く」
(2006年)
企画展「今尾城主 竹腰氏」
(2013年)
などを企画・担当。

伝説の英雄 治水神・禹王

古代中国の帝王は、儒教において

堯、舜といった伝説上の人物でした。この時代は「神話時代」ともよばれ、中国の史書『史記』などにみえる最古の王朝（＝夏王朝・紀元前二十一世紀～紀元前十六世紀ごろ）までを

禹もまた実在を示す根拠に乏しく、
伝承の域を出ません。しかし近年、
中国では夏王朝のものと想定される
遺跡の研究成果が相次いで公認さ
れ、古代史が見直されつつあります。

中国の神話では、禹は頻発する黄河流域の洪水を治めるため、山野を開き湖を浚渫するなど、十三年をかけて各地で治水工事を行つたとされています。その功績が認められて、せんじょう禅讓（注）により舜王の後継者とな

り、禹王を始祖とする夏王朝は、約四百七十年間続いたと考えられていてます。

禹王は、「文命」「大禹」「夏禹」「戒禹」などとも呼ばれ、古くから治水の神として崇拜されてきました。秦

の始皇帝は、禹王の治水伝説に縁の深い浙江省紹興市会稽山の麓に禹碑を建てて顕彰し、孔子や孟子などの儒家家は、禹王を聖人や治水功労者として称えています。

中国では禹王にまつわる地名のほか、顕彰碑や巨大な石像が数多く残されており、禹王崇拜の象徴とされ

で日本最古の禹王顕彰遺跡（以下「禹
者や僧侶により、禹王が治水の神と
して紹介され広まりました。現時点
で日本では、隋や唐か
らもたらされた文物や留学帰りの学
生たちによって、禹王が治水の神と
して紹介され広まりました。現時点
で日本最古の禹王顕彰遺跡（以下「禹

王遺跡」というと考えられているのが鴨川（京都市）河畔に十三世紀頃に建てられたと伝わる夏禹廟で。しかしその後の京都の市街地開

発や堤防修築などによつて存在意義が薄れ、「此廟今はなし」（きよまちかほ京町鑑）一七六二年）とあるように、18世紀半ばには滅失していいたことが分かつ

日本における禹王崇拜

ています。

近世以降、日本各地に禹王を祀る祭壇や碑、禹王の業績になぞらえた後世の治水顕彰碑が建てられました。その数は、画像や影音を含めて約60件にのぼります。地域は北海道

から沖縄までと広範囲に及び、特に
関東の利根川水系、濃尾平野の木曽
三川流域、大阪や京都の淀川水系に
多く分布しています。これらの地域
は、長大な河川が流れる比較的低地
な平野部（一部丘陵地を含む）で、
水害多発地域という点で共通してい
ます。そこで、河川の合流部や堤防



研究資料

に近接した場所に禹王を祀ることで、水害の減少を願つたのです。

禹王遺跡の成立時期については、江戸初期から平成までと幅広く、地域間の関連性についても今後の研究が待たれるところです。ただし、前述の鴨川河畔の夏禹廟から数百年を経た江戸時代になつて禹王崇拜が高まつた背景には、徳川幕府が儒学を文治政策の基本理念としたことが挙げられます。古代中国の名君主を聖人として崇めた儒学思想の浸透が、外国起源の治水神・禹王を日本固有の神となるぶ信仰の対象にならしめたのです。

なお京都御所御常御殿には、幕末の狩野派絵師鶴沢探真が描いた襖絵「大禹戒酒防微図」があります。この図は、美酒の献上を受けた禹が、國主たる者が酒に溺れては国が滅ぶとして自戒をしたという故事に基づくもので、治水だけでなく、理想の天子像としての禹王の姿をあらわしています。

江戸時代、尾張・美濃・伊勢の国境にあたる海津市域には、幕府領・本領などの村々が混在していました。宝曆の御手伝い普請に代表される大規模な国役普請や定式普請、百姓自普請といった官民双方からのお治水対策がくり返し行われ、領主にとっても水害多発地の領地經營は容易ではありませんでした。江戸前期の高須藩主小笠原氏は、水害を理由に転封を願い出て許され、越前国勝山へ転出しています。

元禄十三（一七〇〇）年、尾張藩主二代徳川光友の次男松平義行が、所領の半分を美濃国高須（海津市海津町）とその周辺の村々に移されて禹須を本拠とします。以後明治まで十三代続き、その間、尾張藩の支藩として、後継者をさし出したり、また家臣の派遣や恒常的な経済援助を行ったりして、禹王像の木像を背後にある松平義建の花押

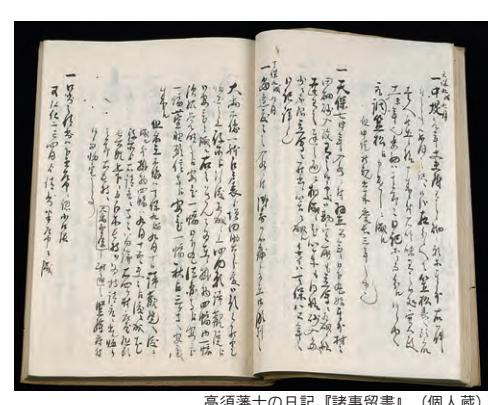
みえます。

「天保九戌九月
一 当辺度々の入水につき御■御
心痛在らせられ、御彫刻の大
禹須像一体江戸表より増田助
山へ転出しています。

元禄十三（一七〇〇）年、尾張藩主二代徳川光友の次男松平義行が、所領の半分を美濃国高須（海津市海津町）とその周辺の村々に移されて禹須を本拠とします。以後明治まで十三代続き、その間、尾張藩の支藩として、後継者をさし出したり、また家臣の派遣や恒常的な経済援助を行ったりして、禹王像の木像を背後にある松平義建の花押

みえます。

右の御贊在らせられ候掛け物四幅の内、一幅は須脇覚明寺へ安置する御安置と成る



禹須藩士の日記『諸事留書』（個人蔵）

置、一幅は日下丸法圓寺へ安置、一幅は菅野願信寺へ安置、一幅

び重なる水害に悩まされてきました。

東から西へ傾斜する濃尾平野では、長野県木曽山中を源流とする木曽川と岐阜県美濃北部を源流とする長良川は、それぞれ平野部に出たところで進路を西に変えてさらに南進して流れます。そして岐阜県揖斐川町から養老山麓に沿つて流れる揖斐川も加わり、3つの川は海津市付近で合流または並流して伊勢湾にそそぎます。

江戸時代、尾張・美濃・伊勢の国境にあたる海津市域には、幕府領・尾張藩領・高須藩領・垣畠藩領・旗本領などの村々が混在していました。宝曆の御手伝い普請に代表される大規模な国役普請や定式普請、百姓自普請といった官民双方からのお治水対策がくり返し行われ、領主にとっても水害多発地の領地經營は容易ではありませんでした。江戸前期の高須藩主小笠原氏は、水害を理由に転封を願い出て許され、越前国勝山へ転出しています。

そのいきさつが高須藩士の日記にみえます。

大禹聖像——此の通りの長持絵符付け候て帰宅の事」（『諸事留書』傍線筆者加筆）

尤も、役所より右請け取りに寺々は勿論、右四力村庄屋・組頭・長百姓、特に白木長持を持たせ請け取りに出る。帰りの節、右長持にれへ渡しに成る。

但し、禹王木像は天保九戌九月十日諦観院へ渡しに成るほか、掛け物四幅は九月十五日それぞが財政難により移転は進まず、六代義裕のとき計画を中止して、もとの高須にもどしました。そして十代義建は、水害に悩む領民のため、天保九（一八三八）年九月禹王の木像を制作して高須城下の寺院（諦観院）に祀るよう下賜しました。

受けるなど、宗家と密接な関係にありました。

高須藩主四代義敏は、高須がたびたび水害に遭うため幕府に願い出て、居館をはじめ城下町を養老山地の麓へ移す許可を得ました。ところが財政難により移転は進まず、六代義裕のとき計画を中止して、もとの高須にもどしました。そして十代義建は、水害に悩む領民のため、天保九（一八三八）年九月禹王の木像を制作して高須城下の寺院（諦観院）に祀るよう下賜しました。

禹王木像背後にある松平義建の花押

が分かります。木像が安置された諦觀院は法華庵（現法華寺）ともいい、高須の居館に近い日蓮宗の寺院です。同時に下賜された四幅の掛け軸の安置先は高須城下の四辺（東・秋北・須脇村）にあたり、領内を囲む江村、西・日下丸村、南・萱野村、北・須脇村）にあたり、領内を囲むように禹王の像を祀る事で、水害から地域を守ろうとする藩主の祈りが感じられます。

天保十四（一八四三）年に義建が

高須へ帰国した際の記録では、八月二十八日「禹王の御まつり」に町人らがこそつて見物に出かけ、藩主も臨席して広場に設けた舞台で舞楽が催されるなど、大変なにぎわいであつたようです。その後は史料が不足していく分かりませんが、禹王の木像は昭和後期頃まで法華寺内に建てられた御堂に安置され、折々人々が参拝したということです。

なお禹王画軸の作者は、現存する掛け軸に見える「紫岡宋琳」の署名から、江戸時代末期の尾張藩御用絵師宋紫岡であることが分かります。

宋紫岡は江戸在住の南蘋派系絵師で、尾張藩主に近侍して尾張藩上屋敷の庭園図や花鳥図など精微な写実画を描きました。紫岡が禹王の肖像

を描くにあたり基とした像の確定にはまだ時間が要しますが、尾張藩主初代徳川義直(よしなお)が深く儒学に傾倒して聖堂を造営し、それぞれの聖人像を



「大禹王尊」（鹿野 個人宅）



禹王画軸（萱野　願信寺藏）

祀つていたことなどから、尾張徳川家に代々伝わった禹王の図像を手本としたものと推測できます。

さらに海津市海津町鹿野の個人宅には、「大禹王尊」と書かれた巻物を祀る祠堂があります。これは水害防除と五穀豊穰祈願として高須藩主（10代義建と思われる）から下賜されたと伝わっており、現在も毎年五月に仏式のお祭りが行われています。また、同市南濃町田鶴地区では、堤防上にあつた灯明を「禹王さん」と呼び、十月には地域の人々が集まつてお祭りを行っています。

川県開成町で、第一回全国禹王文化まつり（禹王サミット）が開催されました。これは、日本全国の禹王崇拜の歴史と遺跡の実状を探求する人々が一堂に会する研究大会で、第二回目（平成二十四年）は群馬県片品村で、第三回目（平成二十五年）は香川県高松市で開催されました。今後は広島県広島市や大分県臼杵市での開催が予定されています。

ごまらず、東アジア地域での禹王崇拜の実態の解明を期待するもので
す。

注 禅譲＝古代中国で、帝王が世襲ではなく、有徳者に位を譲ること。

※本稿の一部は『治水神禹王をたずねる旅』の拙稿部分と重複しています。

※文中の■は、虫食い等により判読できない箇所。

参考引用文献
『治水神禹王』
（大脇良夫／著）

『物語で

北原峰

いずれも、各地域に残る禹王遺跡の存在意義や成立の経緯などを明らかにしようという郷土史研究グループや教員、個人研究者が中心となって活動を進めています。治水神・禹王を通して、地域間に共通する地理



禹王サミットin讃岐・高松（平成25年7月）の様子（写真提供：香川県栗林公園観光事務所）

どんぼり池の竜（多治見市・青木町・錦町）

昔、多治見村に「どんぼり池」と呼ばれた広い沼地があつて、いつの頃からか池には雌雄二匹と子竜一匹が棲んでいると言い伝えられました。

そのどんぼり池を村人は山から土を運んで埋めたて田畠をつくり始めました。広かつた池は年ごとに周囲が埋められ少しづつせばめられていました。

ある夏の昼下がり、激しい夕立の中、天を裂くような雷鳴が響き、池から大きな水柱がそびえる様に立ち昇りました。山の上から見ていた村人の話では、二匹の竜が縄の様に絡んで天に昇つていく姿が見えたということです。

月日は流れ、どんぼり池はすっかり埋められ、竜の話を知る者もいなくなつたある年の夏。

この年は例年になく雨が少なく、田畠は乾き、作物が枯れるばかりか飲み水さえ不自由する大変な日照り続きでした。炎天下の中、一人の旅の僧がかつてのどんぼり池の真ん中あたりで、一心に祈っていました。しばらくして僧は古い草ぶき屋根の家に入り、家人にむかつて「日照りが続くのは子竜の祟り。池を埋められた子竜が水を求めて苦しんでいる」と告げ、土間の方隅を指しました。

そこには墨の色もおぼろげな古びた竜の掛け軸がありました。

「水を求める子竜のために、毎日掛け軸に水を供えてあげてください。水を供えてくれれば、三日後の午の刻に雨を降らせてくれるでしょう」旅の僧は言い残して立ち去りました。

不可解に思いながらも家人が掛け軸に水を捧げると、みるみるうちに墨の色も黒々と一匹の竜が浮び上がつてきました。驚いた家人はこれを村人達に知らせてまわりました。

はたして三日がたつと、昼飯の時間になると、辺り一面が急に暗くなり、たまたまつける様な大粒の雨が降つてきました。久しぶりの雨に歓喜した村人達は、「子竜さまが雨を恵んでくださった」と語りあい、件の家に集まって掛け軸に手を合わせ拝みました。

ほどなく村では小さな祠をつくり、掛け軸とともに子竜をていねいに祀りました。以後、干ばつの被害は無くなつたそうです。



木曽川文庫利用案内

ヨハニス・デ・レイケに関する文献など約4,500点の図書などを収蔵、木曾三川の歴史を知るために、多くの方々のご利用をお待ちしています。



《開館時間》

午前8時30分～午後4時30分

《休館日》

毎週月・火曜日(月・火曜日が祝祭日の時は翌日)・年末年始

《入館料》無料

《交通機関》

国道1号尾張大橋西詰から車で約10分

名神羽島I.Cから車で約30分

東名阪長島I.Cから車で約10分

木曽川文庫へのお問い合わせは

〒496-0946 愛知県愛西市立田町福原
TEL.0567-24-6233 FAX.0567-24-5166

Mail sendouhi@dream.ocn.ne.jp



KISSOホームページ
<http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/index.html>

Johannis de Rijke の日本語表示については、かつては「ヨハニス・デ・レーク」と呼ばれていましたが、「KISSO」では、現在多く使われている「ヨハニス・デ・レイケ」と表記しています。

編集後記

歴史記録は、本号より「高木家文書にみる宝曆治水」について、2回に渡り連載します。

なお、この資料は、創刊号からの全てがKISSOホームページよりダウンロードできます。

表紙写真

上

「神言会 多治見修道院」

昭和5年(1930年)、ドイツのモール神父により、日本の修道士の養成を目的に建てされました。建物の周囲に広がるぶどう畑で収穫したぶどうを使って、修道院の地下室でワイン造りが行われており、日本で唯一、ワインを醸造する修道院としても知られています。

下

「虎渓山 永保寺」

永保寺は、鎌倉時代(1313年)に開創された禅寺です。「虎渓」の名前の由来は、夢窓疎石がこの地を訪れた際、中国廬山の虎渓の風景(現在は世界遺産)に似ていたことに由来するとされています。鎌倉末期に建てられた「観音堂」と「開山堂」は国宝に指定され、池泉回遊式庭園は国の名勝に指定されています。

(写真提供:多治見市観光協会)

『KISSO』 Vol.89 平成26年1月発行

編集 木曾三川歴史文化資料編集検討会(桑名市、木曽岬町、海津市、愛西市、弥富市ほか)

発行 國土交通省中部地方整備局木曽川下流河川事務所調査課

〒511-0002 三重県桑名市大字福島465

TEL(0594)24-5715 ホームページ URL <http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/>